



親子ひろしま訪問団

2013年訪問の記録

平成25年（2013年）8月5日～7日



神奈川県秦野市

目 次

は し が き	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1 訪問の概要	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
2 訪問団員(参加者)の声	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
3 団員名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
4 訪問団規約	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22
5 資 料		
(1) 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文	・・・・・・・・	23
(2) 広島市平和宣言・こども代表「平和への誓い」	・・・・・・	24
(3) 広島平和記念公園・周辺ガイドマップ	・・・・・・	28

◆訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	主 な 内 容
7月23日(火) 午前11時～11時半	結団式 市長表敬訪問	市長メッセージ・千羽鶴の受け渡し 場所：秦野市役所議会第1会議室
8月5日(月) } 8月7日(水)	広島訪問	① 広島平和記念資料館見学 ② 原爆の子の像への千羽鶴の奉納 ③ 平和記念式典 参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ とうろう流しの参加 ⑥ 平和記念公園内碑めぐり ⑦ 宮島見学
8月15日(木) 午前9時半～10時	報告会	市長への訪問団事業の報告 場所：秦野市役所西庁舎3階会議室

はしがき

広島・長崎で原爆が投下され、多くの尊い命が奪われてから、68年が経ちました。今でも原爆の後遺症や心の傷で苦しむ方がたくさんいる一方で、復興の努力の中、平和を訴えてきた戦争体験者は減少の一途をたどり、悲惨な記憶の風化が進行しつつあります。また、現代社会の中でも、いじめや虐待、殺人により尊い命が奪われるといった悲しい報道が毎日のように流れ、世界にはいまだ紛争が絶えず、私たちが希求する平和な社会と言える状況にはないように思われます。

戦後50年を契機に始まったこの「親子ひろしま訪問団」は、今年で19回を迎えました。訪問した広島はとても暑く、蝉が賑やかに鳴いていました。68年前もきっと、人々が「暑いねえ」と挨拶を交わしあうような普通の生活が繰り広げられていたことでしょう。その生活を、また尊い命を、一瞬にして奪った原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを思うと、言葉もありません。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。「人が人を傷つける」という出来事がたびたび報道されている昨今、訪問団員10名にとって、原爆ドームや平和記念資料館の見学、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、改めて平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

秦野市では、核兵器廃絶・非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島・長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年、「平和の日」を絡めた日程で、市民が主体となった様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市役所に「平和の灯モニュメント」を市内事業所の協力を得て、自治体としては全国で14ヶ所目、神奈川県内では初めて設置しました。このモニュメントの種火は、「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火し持ち帰った炎を、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年は、4年に1度開かれる「平和首長会議」の総会が平和記念式典の日程に合わせて、広島市を会場に開催されました。8月3日から6日にかけて開催された総会には、世界18カ国の計157都市から300人余りが参加し、加盟自治体である秦野市も古谷義幸市長が出席しました。

古谷市長は、総会の合間を縫^ぬって訪問団と合流し、市民の皆様から託された千羽鶴を団員とともに原爆の子の像^{ほうのう}に奉納しました。今年、訪問団が広島に届けた千羽鶴はおよそ2万羽に上りました。一羽一羽、平和への思いを胸に丁寧^{ていねい}に折っていただいた多くの市民の皆様は、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴の重さに、鶴を折られた皆様の思いを感じながら、心を込めて鶴^{ささ}を捧げました。

平和記念式典の参列や被爆体験談の聴講などの貴重な経験を含め、被爆地・広島で見聞き学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心より願います。

秦野市くらし安心部市民自治振興課

1 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月5日(月)

- 7:50 集合(小田原駅)
- 8:09 小田原発
- 11:45 広島着
- 14:00 広島平和記念公園到着
- 千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納
- 14:50 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で千羽鶴とともに

原爆の子の像

この像のモデル^{ささきさだこ}佐々木禎子さんは、2歳の時に^{ばくしんち}爆心地から1.7kmの自宅で被爆した。足が速く、とても元気な子だったが、小学6年生の時に^{げんぱく}原爆症^{しょう はっしょう}を^{つる}発症した。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けたが、中学校に入学できずに亡くなった。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられた。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川^{ゆかわ}秀樹^{ひでき}博士は、この子供たちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘^{かね}を寄贈した。その鐘の下に金色の折り鶴が^{きぞう}つるされ、^{ふうりん}風鈴式に音が出るようになっている。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に^{ふくせい}複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されている。

訪問団は、広島到着後、市民から^{たく}託された2万羽



平和な未来への夢を託す少女の像



同年代の禎子さんを思い、鐘を鳴らす

の千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に^{ささ}捧げた。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が^{ほうのう}奉納されていた。

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の^{はんかがい}繁華街だった。しかし、爆心地に近かったため、原子爆弾投下により^{かいてつ}壊滅した。

その後、1954（昭和29）年に平和を祈念し、建築家の^{たんげけんぞう}丹下健三氏の手により公園として生まれ変わった。

園内には平和記念資料館をはじめ、^{げんぼくしぼつしゃいれいひ}原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、



公園内を見学する古谷市長と訪問団員

平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されている。

毎年、原子爆弾が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が^{もとやすがわ}開催され、夜には元安川をはじめ市内6つの川で^{ぎせいしゃ}犠牲者を^{いれい}慰霊する「とうろう流し」が行われている。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の^{じっそう}実相を伝え、核兵器のない平和な世界の^{こうけん}実現に貢献するため設置された。本館と東館の2つの建物からなり、東館では、被爆までの広島^{けい}の歴史や原子爆弾の開発から投下までの^{けい}経緯、現在の核兵器の状況を、本館では、被爆者の^{いひん}遺品や^と高熱で^{かわら}融けた瓦等の被爆資料を展示している。

また、核実験への抗議文を展示してあり、その数は600通以上、人類最初の被爆地として、強く、地道に訴えを発し続けている。

本やテレビで見るのとは違った生々しい展示は、静かに、そして強く、訪問団員の心に戦争や原爆の悲惨さを訴えかけた。



真剣に展示資料に見入る団員たち

(2) 訪問2日目・8月6日(火)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに
平和祈念式参列
- 9:30 被爆者体験談の聴講
- 14:00 平和記念公園内の碑めぐり
- 19:30 とうろう流し参加



それぞれの平和への思いをとうろうに込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府・自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われる。

午前8時ちょうどに開会し、広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めた。

この一年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は5,859人。名簿搭載者の総数は286,818人に、名簿の数は104冊となった。

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにした。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信された。広島市は、1998(平成10)年から核兵器保有国の駐日大使の式典への参列を求める取組みを開始し、今年、2010年と昨年に続きアメリカのルース駐日大使が参列した。また、昨年に引き続き、福島県浪江町の馬場有町長も式典に出席した。

松井広島市長は平和宣言で、世界の指導者へ向けて、威嚇ではなく対話による安全保障体制への転換を訴えるとともに、日本政府に対し、核兵器廃絶に向けて国際社会との連携強化を求めた。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビで見るのとは異なる厳粛な雰囲気



「平和宣言」を読み上げる松井広島市長

緊張しながら、参列する多くの被爆者、及びご遺族とともに黙祷を捧げた。子どもたちは、広島市長や内閣総理大臣のあいさつ、同年代であるこども代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いとこの貴重な経験を、心に刻み込んだ。

原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪いえがたはにわに似たデザインの碑で、中央の石室せきしつには原爆死没者名簿が納められている。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過あやまちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれている。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打つ。

原爆慰霊碑、祈りの泉、嵐の中の母子像、資料館、平和の灯は、一直線で結ばれるように設計されている。



直線上に原爆ドームが見える設計になっている

平和の灯

建立こんりゅうは、1964（昭和39）年8月1日。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏の設計により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉ようこうろなどの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、1945（昭和20）年8月6日生まれの7人の女性により点火された。

建立の目的は「水を求めてやまなかつた犠牲者なぐさを慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴はんかく しやうちようである。



秦野市にも分けられた平和の灯

秦野市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置したが、親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火した火を持ち帰り、ともし続けている。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七さんより被爆体験のお話を伺った。増岡さんは、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけた。

【被爆体験談（増岡清七さんのお話から抜粋）】

1945(昭和20)年8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300人の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡さんら3年生の半数の70人は、爆心地から約1kmの場所で、引率の先生の話聞いていた。

午前8時15分、突然、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見回すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だかわからないほどの形相だった。皮膚が熱で剥がれ、爪のところで止まり、垂れ下がっていた。

増岡さんも左顔面や腕など皮膚が垂れ下がっていた。何が起こったのか、どこが安全なのかもわからないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じる事。広島市の

増岡清七さん(広島市在住)



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、

反核・平和を訴え続けている。

現在、「広島県高等学校被爆教職員会」会長。

街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕^{ぼうくうごう}には、人が重なり合い、あふれていた。

瀕死^{ひんし}の状態^{じょうたい}で、水や家族を求めていた。木陰^{こかげ}でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷^{ざしき}に運ばれた。すでに多くの人が丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布^{かんぶ}で患部^ふを拭いたが、治療^{ちりょう}はされなかった。



増岡さんの話^わに、真剣^{まこと}に耳^{みみ}を傾^かける団員^{だんいん}たち

翌日、汚い茶碗^{ちawan}にお粥^{かゆ}が1杯置かれたが、皮膚^{うみ}の膿^{うみ}で、左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に、太陽の光が当たると、針でチクチク刺すような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車^{にぐるま}に載せられ親戚宅^{しんせき}に行った。

その時は、増岡さんの体^みを気遣^{きづか}って教えられなかったが、自宅^{ぜんかい}は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養^{りょうよう}のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡さんが15歳のときに亡くなった。恐らく、増岡さんの行方を探すために原爆投下直後の広島^{ひろしま}の街を歩いて回る中で、残留放射能^{ざんりゅうほうしゃのう}を浴びてしまったためと思われる（入市被爆^{かそう}）。火葬^{かそう}する設備がなく、自分自身で荼毘^{だび}に付した。既に兄は特攻隊員^{とっこうたいいん}として沖縄で戦死しており、家族は姉と2人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。

原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、1915（大正4）年に広島県の物産品の販売促進^{はんぱいそくしん}を図る拠点^{きょてん}として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館^{ぶっさんちんれつかん}」という名称だった。その後、「広島県産業奨励館^{さんぎょうしょうれいかん}」と改称^{かいしょう}されたが、県下の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割^{やくわく}も担っていた。

しかし、戦争が激しくなった1944（昭和19）年3月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省^{ないむしょう}中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広

島支社など統制会社^{とうせい}の事務所として使用されていた。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施^{ほどこ}されていた。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板^{だえんけい}の楕円形ドームがのっていた。

爆心地から約200mの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼した。爆風がほとんど垂直^{すいちよく}に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊^{きせきてき}を逃れたものの、館内にいたすべての人々は即死している。



平和、そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸^{ざんがい}と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、1996(平成8)年に世界遺産へ登録された。

静かに佇^{たたず}む原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせた。

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など、50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物がある。訪問団は2グループに分かれ、ボランティアガイドの案内を受けながら平和記念公園内の碑めぐりを行った。

被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）

太田川^{おおたがわ}が元安川^{ほんかわ}と本川に分かれるあたりは、慈仙寺^{じせんじ}という浄土宗^{じょうどしゅう}寺院があったことから、「慈仙寺の鼻」と呼ばれていた。

爆心地から約200mの場所にあった慈仙寺は、強烈な爆風ですべての建物が壊滅、境内^{けいだい}にあった多くの墓石も吹き飛ばされ散乱した。

被爆当時の姿で残されているこの墓石



ボランティアガイドさんの丁寧な説明

(爆心地から約270m)は、広島藩^{はん}浅野家の重臣・岡本宮内^{おかもとくない}の墓である。

平和記念公園の中で、この墓地だけが被爆当時の地面をそのままとどめている。公園が盛り土して建設されたため、周囲を石で囲んで、池の底のようになってしまったこの部分が当時の広島の地面である。



被爆した墓石について説明を受ける訪問団

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人の朝鮮人がおり、数万人が広島市内で被爆したといわれている。



多くの花が手向けられた慰霊碑

「死者の霊は亀の背に乗って昇^{しょう}天^{てん}する」という故事にならって、亀を形どった台座の上に^{ひちゅう}碑柱が建ち、その上に二つの竜を刻んだ冠が載せられている。

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李^り殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋^{ほんかわばし}西詰めに建立された。

その後、各方面からの強い要望により、1999（平成11）年7月に平和記念公園内に移設された。慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われている。

原爆供養塔

爆心地に近いこの付近には、被爆後、遺体が散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数の遺体が運ばれ、茶毘にふされた。

1946（昭和21）年、市民からの寄付により、仮^{かり}供養^{くよう}塔、仮^{かり}納骨^{なつこつ}堂、礼^{れい}拝^{はい}堂が建立され、その後、1955（昭和30）年に、広島市が中心となり老朽化^{ろうきゅうか}した納骨堂を改



犠牲となられた方のご冥福を祈る

築し、各所に^{さんざい}散在していた引き取り手のない遺骨もここに集め納めた。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約7万柱が納められている。

毎年8月6日には、さまざまな宗教・宗派合同の供養慰霊祭が営まれている。

平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立された。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっている。

鐘は、^{ぼんしょう}梵鐘の分野で^{じゅうようむけいぶんかざいほじしや}重要無形文化財保持者（人間^{かとりまさひこ}国宝）である香取正彦が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされている。



平和な世界を願い、平和の鐘をつく



^{つきざ}撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、^{しょうろう}鐘楼の周囲の池には^{おおが}大賀ハスが植えられている。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、火傷の痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものである。

動員学徒慰霊塔

第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため、勤労奉仕に動員され^{せんか}戦禍にたおれた学徒と、原爆の犠牲者を含めた約1万人の学徒の霊を慰めるため建立された。



レリーフの裏には全国の戦没学徒の出身校名が刻まれている

1944（昭和19）年8月の学徒勤労令によって、中学生以上の生徒は^{ぐんじゆ}軍需工場等での^{きんろうほうし}勤労奉仕が強制され、空襲による延焼を防ぐため、建物疎開作業にも多くの生徒が動員された。

広島市内でも被爆当日、市内で建物疎開作業を行っていた国民学校高等科以上の8,000人以上の生徒のうち、約6,300人が犠牲となり、その他に市内の各事業所に出ていた多くの学徒も犠牲者となった。

被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロ離れた^{ひがしはくしまちょう}東白島町にあった
当時の広島^{ていしんきょく}通信局の中庭に、3本のアオギリの木が植
えられていた。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた3
本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の
半分が焼け焦げた。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは、翌年の春、奇
跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって
^{ひへい}疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えた。



その姿で原爆の被害を訴え続ける

1973（昭和48）年、当時の中国郵政局（かつての通信局）の建て替えに伴
い、平和公園内の現在の場所に移植された。3本のうち1本は枯れてしまったが、
この被爆したアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ2世」として大切
に育てられている。

峠三吉詩碑

^{とうげさんきち}峠三吉さんは、爆心地から約3キロ離れた^{はな}自宅で被爆した。その体験を文学の
活動を通して発表し、原爆^{ようご}反対、平和擁護の作品を数多く残した。その代表作であ
る「原爆詩集」は、世界的な^{はんきょう}反響を与えた。

平和記念公園内の碑文には、次のような詩が刻まれている。

「ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ こどもをかえせ
わたしをかえせ
わたしにつながるにんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよの
あるかぎり
くずれぬへいわを へいわをかえせ
峠 三吉」



峠三吉詩碑にもたくさんの千羽鶴が捧げられている

とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪った。そして、即死を^{まぬか}免れてもひどい火傷を負った人たちが大勢いた。その人たちの多くは、その熱さと痛みになんて耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたという。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和23～4年ごろ、親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが^{ついぜん}追善と供養のため、手作りの^{とう}灯籠を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりとされている。

灯籠には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的だが、最近では「平和への思い」が書かれる光景も目立つ。長い歴史を持つ

「とうろう流し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになった。毎年、8月6日の夕刻から^{もとやすばし}元安橋の上流から流される。

広島訪問2日目を終えた訪問団10人は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを乗せて、灯籠を流した。



とうろうに書くメッセージを考える団員



被災者の霊を慰め、平和な未来を願う

(3) 訪問3日目・8月7日(水)

- 9 : 3 0 広島駅発
- 1 0 : 4 0 世界遺産「いつくしまじんじや厳島神社」着
- 1 6 : 4 7 広島駅発
- 2 0 : 3 4 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学



2 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

- 私が広島原爆と平和について興味を持ち始めたのは、小学校6年生の頃で、国語の授業で「平和の砦を築く」を教わったことがきっかけでした。それから1年たった中学1年生の頃にもう一度広島原爆について教わり、広島へ行きたいという思いが一層強まり、参加しようと決めました。



7月の結団式で団員に手渡された千羽鶴

- 人が犯した過ちなものならば、人の手で何とかしなくてはならない。平和問題が多く出される今、世界の国々と話し合っているけど、我々日本国民に関心が無くては意味がありません。だからこそ、私は多くの方が実際の場所へ行き、体験者の方から話を聞いて、自分の子孫や多くの人々へと語り継いでいかなくてはならないのだと思います。私もこの体験を通して多くの人々に伝え、残し、戦争とは、平和とは何かを現地での体験を通し考えたいと思います。
- 秦野にいたら体験できないことを、広島に行って平和や命の大切さなどについて真剣に考えてほしかったので参加しました。今時の子というのか、ゲームなどをやりながら平気で「死ね」「殺す」などと軽々しく言うので、命についても一度よく考えてほしいと思っています。
 - 戦争について考え始めたのは小学校3年生の時でした。グアムのガン・ビーチで日本軍の大砲を見た時、戦後も戦争の跡が残っていることを実感しました。それから『はだしのゲン』を読み、そして世界各地の内紛のニュースを見ました。その度、「幸せだなあ」と呟いてしまいます。
- ただ、幸せだなあ、で終わらせていいのか。そう考えた時に、どんな形で戦争が伝えられているのかを、もっと知りたいと思い参加しました。
- 私が広島で知りたいことは他にもあります。宮島の厳島神社です。この前級友が行ったと言っていて、気になっていました。世界遺産にも登録されているので、とても楽しみです。
- 世界で起きている戦争、身近で起きることもあるいじめや自殺は、命の尊さを考え

ればなくなる方向にいくのではないかと、思います。広島の悲しい出来事を自分の目で耳で感じて、平和や命について深く考えるきっかけになればと思い参加を希望しました。『いしぶみ』という本を読んだので、展示物をしっかり見てこようと思います。

- 今、福島においての原発問題、北朝鮮の核兵器など、原子力（放射能）に関する様々な意見や世の中の動きを見るにつけ、「人間と原子力」ということが日常の便利さ、主に経済においてのみ考えられているような気がしていた。日本は原爆を投下された唯一の国として戦後ずっと核兵器のむごさを世界に訴え続けているのに、福島の原発事故においても、核の恐ろしさを経済と天秤にかけているような気がしていた。広島での核による悲劇をもう一度自分で見たいと思った。語り継ぐ人々が高齢で亡くなっていく今、効率重視で「何をしても構わない」ような人間の選択はあってはならないということを再認識したいと思って今回、参加します。
- 初めて原爆の被害を見るのですごい怖いけど、頑張って見たいです。
- 自由研究でも広島の原子爆弾のことなどをやろうと思ったので、この機会にたくさん学べると思いました。あと、世界遺産の宮島に、純粹に行きたいと思いました。とても楽しみにしています。
- 今回、長男の時から2回目の訪問団へ参加の機会をいただきました。前回は普段経験できない体験をさせていただき、今回も娘と二人で広島の原爆を通して平和について深く考えるようにしたいと思っています。



市長表敬訪問(結団式)にて、古谷市長、すえひろこども園の皆さんと記念撮影

(2) 訪問後の感想

- 原爆で皮膚が垂れ下がり、剥けて、それでも歩き続けている場面の人形を見て、ビックリしたり、ショックだったり、被爆している人形を見ていると、いろんな感情があふれ出すようで、胸が苦しくなりました。平和は一人一人が人に優しくすることや、友だちを大切にすることで実現できると思います。私はこれからも、友だちを大切にすることを忘れないようにしていきたいです。
- 今回の訪問を通して、68年前広島の上で起こった現実のむごさ、悲惨さを実感しました。特に被爆体験を語ってくれた増岡さんの話から、人間が人間にした行為としては最悪の悪だと憤りを感じました。一発の爆弾が何十万人の人間の命と人生と家族を奪ったのです。増岡さんからお母さんとお父さんを奪ったのです。それは全て人間がしたことです。人間が同じ人間を殺すという悪が起こっていたのです。現実だったんです。とても悲しいことです。

平和が当たり前の世の中ですが、私たち次世代はこの人間が犯した罪を認め、二度と増岡さんたちのようなつらく悲しい思いをした被爆者を作ってはいけない



増岡さんの話真剣に耳を傾ける団員

と思いました。

今回、私の娘も幼い目と心にこの現実を刻んでくれたと思います。増岡さんや被爆者の方々が教えてくれた「平和を作る心」をきっと感じ育ててくれると信じています。本当に貴重な体験をさせていただき、感謝申し上げます。

- 今回の広島訪問に参加して本当に良かったです。弟の時にも参加してあげたいと思います。弟を預けて、息子との二人旅は、とても意味のあるものとなったと思います。行く前は塾に行くのを拒みぐずぐずしていましたが、帰ってきたらリフレッシュできたようでスムーズに通うようになっています。息子の中で何かが変わったようです。

また、男の子1人というのも心配しましたが、全く心配無用でした。最終日には子どもたち同士で「はだしのゲン」を回し読みしたり、お菓子を分け合ったり、フェリーから魚を探したりと、まるで前から知り合いだったかのようなようでした。こ

れを機会に時々近況報告し合えたらなあと思います。

平和記念式典に参加できてよかったです。貴重な体験ができました。増岡さんのお話や、平和公園の碑めぐりなど、生のお話が聞けてためになりました。

それに、食事もお好み焼きや穴子飯など広島の名物を取り入れていただき、とても美味しくありがたかったです。市長さんにも現地でお会いすることができ、子どもたちにとって、とても身近な存在になったようです。ありがとうございました。



式典参列後、古谷市長、増岡さんとともに

- 訪問団で行くまでは、原爆について漠然としたイメージしか持っていなかったけど、実際に聞いてみるととても怖いもの、そして後に大きな影響を及ぼすものということが分かりました。

聴講では、お話で聞いたことを実際に体験された方が自分の近くにいると思うと、とても不思議な気持ちになりました。

平和式典で妨害音を出している人がいることが驚きでした。こんなに大事な式で、そんな音を出すなんて、テレビで見るのとはまた違いました。

原爆のことを私たちが伝えてもらったので、次は行く前の私のように漠然としたものしか知らない人がいなくなるくらいまで、広めていきたいと思いました。

- 平和とはどういうことか、広島訪問を終えた後、よく考えています。原爆投下により広島に起きたことを記録として残す施設、平和を世界中で守ろうと確認し合



静かに平和を訴え続ける原爆ドーム

う大きな式典、1人でも多くの人に伝えようと活動される方々。

次々と知らされるのは、広島悲惨な状況なのに、被爆体験者の方の私たちへのメッセージは「幸福に暮らしてください」という温かい言葉でした。「世界の平和」と、周りの人を大切にして不安のない「幸福な暮らし」は一見規

模が全く違う話だけど、実はつながっていると教えていただきました。

過去の過ちで失ったものの大きさをずっと忘れず、小さなことでもまず自分でできる行動、自分の周りを笑顔にすることから心がけてみたいと思います。親子で一緒に考えていきます。

- 核兵器、核実験、また原発問題、あらゆることは「他者を思いやる気持ち」を持つことで結論に導かれると思った。この先いろんな開発がされ、核以上に人類にとって大きなものを作り出してしまうかもしれない。地球に生きる生物である以上、自分たちの経済的文明的発展ばかり重視しては、問題は解決しないと思った。

広島に行って原爆のことを中心に学んだが、最後には「他者（他の生物とか）を思いやる気持ち」に考えが至ったことは自分でも意外だった。

- 私が最初に思っていた核兵器の恐ろしさは、現実とは全く違いました。原爆での放射線で、生き延びた人たちも、死へと連れて行ってしまう核兵器がとても恐ろしく感じて、私はもうこのようなことが起きてはならないと感じました。



広島訪問を通して感じた思いをとうろうに込める

- 今回の体験を通して私は、「平和」とは、ただ願うのではなく自分たちの手で築き造り上げていくものだということを学びました。

被爆者の平均年齢が78歳を超え、お話を伺う機会も減りつつある今、原爆のことを他人事のように聞く人が増えていることでしょう。そんな中で、「平和について考えろ」と言われても、考えられるわけがありません。

そのため、今は今回の体験で学んだことをまとめ、中学校の人々に伝えていこうと思います。目をそらしてはならない事実を皆さんに受け入れて、平和への願いを持ち、多くの人々へと伝えていってほしいのです。

～「秦野市平和の日」に、古谷市長へ訪問の報告～

秦野市では、市民一人ひとりが改めて平和や命の大切さを考えるため、8月15日を「秦野市平和の日」と決めました。その「平和の日」に合わせ、8月15日（木）、市役所にて古谷義幸市長に広島訪問の報告を行いました。

始めに、関口由紀子団長より7月23日（火）に実施した結団式から、8月5日（月）～7日（水）の3日間の広島訪問までの訪問団事業の報告を行った後、訪問団員の子どもたち5人が一人ずつ、8月6日の平和記念式典に参列した思い出や、平和記念資料館の生々しい展示資料を見て感じたこと、被爆体験談の講師のお話で印象に残っていることなど、広島訪問の感想を発表しました。



被爆地・広島で見て、感じたことを、一人ひとり自分の言葉で報告

「行く前は、平和というのは戦争が無いことだと思っていたけれど、ただ明るく楽しく暮らしていくことも平和なのだと知ることができました」「戦争はもうあってはならないと思いました」といった子どもたちの報告を受け、古谷市長は、「今までたくさんの訪問団を見送ってきましたが、今回、皆さんと一緒に広島を訪問でき、とても良い経験となりました。これからは、この訪問団で得たことを自分だけの思い出にせず、皆さんが語り部となって、この経験を周りの人たちに伝えていってください。」と話しました。



古谷市長、くらし安心部長とともに

3 団員名簿

保護者氏名	子供氏名	役 割
せきぐち ゆきこ 関口 由紀子	せきぐち しおり 関口 詩緒里 本町中2年	団 長
こいずみ おりえ 小泉 織絵	こいずみ みな 小泉 美奈 東小6年	副団長
こばやし かずこ 小林 和子	こばやし るり 小林 るり 西小5年	監 事
うちだ みずほ 内田 瑞穂	うちだ はるか 内田 遼河 本町小6年	記 録
おおかわ さちこ 大川 左知子	おおかわ わかさ 大川 若紗 南小5年	会 計

4 訪問団規約

(名称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を被りながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、記録、会計及び監事を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市くらし安心部市民自治振興課に置く。

(解散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

5 資料

(1) 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

(2) 広島市平和宣言・こども代表「平和への誓い」

◎広島市平和宣言

「あの日」から68年目の朝が巡ってきました。1945年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾によりその全てを消し去られた家族がいます。「無事、男の子を出産して、家族みんなで祝っているちょうどその時、原爆が炸裂(さくれつ)。無情にも喜びと希望が、新しい『生命(いのち)』とともに一瞬にして消え去ってしまいました。」

幼くして家族を奪われ、辛うじて生き延びた原爆孤児がいます。苦難と孤独、病に耐えながら生き、生涯を通じ家族を持たず、孤老となった被爆者。「生きていてよかったと思うことは一度もなかった。」と長年にわたる塗炭(とたん)の苦しみを振り返り、深い傷跡は今も消えることはありません。

生後8か月で被爆し、差別や偏見に苦しめられた女性もいます。その女性は結婚したものの1か月後、被爆者健康手帳を持っていることを知った途端、優しかった義母に『あんた一、被爆しとるんね一、被爆した嫁はいらん、すぐ出て行け一。』と離婚させられました。」放射線の恐怖は、時に、人間の醜さや残忍さを引き出し、謂(いわ)れのない風評によって、結婚や就職、出産という人生の節目節目で、多くの被爆者を苦しめてきました。

無差別に罪もない多くの市民の命を奪い、人々の人生をも一変させ、また、終生にわたり心身を苛(さいな)み続ける原爆は、非人道兵器の極みであり「絶対悪」です。原爆の地獄を知る被爆者は、その「絶対悪」に挑んできています。

辛く厳しい境遇の中で、被爆者は、怒りや憎しみ、悲しみなど様々な感情と葛藤(かっとう)し続けてきました。後障害に苦しみ、「健康が欲しい。人並みの健康を下さい。」と何度も涙する中で、自らが悲惨な体験をしたからこそ、ほかの誰も「私のような残酷な目にあわせてはならない。」と考えるようになってきました。被爆当時14歳の男性は訴えます。「地球を愛し、人々を愛する気持ちを世界の人々が共有するならば戦争を避けることは決して夢ではない。」

被爆者は平均年齢が78歳を超えた今も、平和への思いを訴え続け、世界の人々が、

その思いを共有し、進むべき道を正しく選択するよう願っています。私たちは苦しみや悲しみを乗り越えてきた多くの被爆者の願いに応え、核兵器廃絶に取り組むための原動力とならねばなりません。

そのために、広島市は、平和市長会議を構成する5,700を超える加盟都市とともに、国連や志を同じくするNGOなどと連携して、2020年までの核兵器廃絶をめざし、核兵器禁止条約の早期実現に全力を尽くします。

世界の為政者の皆さん、いつまで、疑心暗鬼に陥っているのですか。威嚇によって国の安全を守り続けることができると思っているのですか。広島を訪れ、被爆者の思いに接し、過去にとらわれず人類の未来を見据えて、信頼と対話に基づく安全保障体制への転換を決断すべきではないですか。ヒロシマは、日本国憲法が掲げる崇高な平和主義を体現する地であると同時に、人類の進むべき道を示す地でもあります。また、北東アジアの平和と安定を考えると、北朝鮮の非核化と北東アジアにおける非核兵器地帯の創設に向けた関係国の更なる努力が不可欠です。

今、核兵器の非人道性を踏まえ、その廃絶を訴える国が着実に増加してきています。また、米国のオバマ大統領は核兵器の追加削減交渉をロシアに呼び掛け、核軍縮の決意を表明しました。そうした中、日本政府が進めているインドとの原子力協定交渉は、良好な経済関係の構築に役立つとしても、核兵器を廃絶する上では障害となりかねません。ヒロシマは、日本政府が核兵器廃絶をめざす国々との連携を強化することを求めます。そして、来年春に広島で開催される「軍縮・不拡散イニシアティブ」外相会合においては、NPT体制の堅持・強化を先導する役割を果たしていただきたい。また、国内外の被爆者の高齢化は着実に進んでいます。被爆者や黒い雨体験者の実態に応じた支援策の充実や「黒い雨降雨地域」の拡大を引き続き要請します。

この夏も、東日本では大震災や原発事故の影響に苦しみながら故郷の再生に向けた懸命な努力が続いています。復興の困難を知る広島市民は被災者の皆さんの思いに寄り添い、応援し続けます。そして、日本政府が国民の暮らしと安全を最優先にした責任あるエネルギー政策を早期に構築し、実行することを強く求めます。

私たちは、改めてここに68年間の先人の努力に思いを致し、「絶対悪」である核兵

器の廃絶と平和な世界の実現に向け力を尽くすことを誓い、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げます。

平成 25 年（2013 年） 8 月 6 日

広島市長 松井 一實

◎こども代表「平和への誓い」

今でも、逃げていくときに見た光景をはっきり覚えている。

当時3歳だった祖母の言葉に驚き、怖くなりました。

「行ってきます」と出かけた家族、「ただいま」と当たり前に戻ってくることを信じていた。でも帰ってこなかった。

それを聞いたとき、涙が出て、震えが止まりませんでした。

68年前の今日、わたしたちのまち広島は、原子爆弾によって破壊されました。

体に傷を負うだけでなく、心までも深く傷つけ、

消えることなく、多くの人々を苦しめています。

今、わたしたちはその広島に生きています。

原爆を生き抜き、命のバトンをつないで。

命とともに、つなぎたいものがあります。

だから、あの日から目をそむけません。

もっと、知りたいのです。

被爆の事実を、被爆者の思いを。

もっと、伝えたいのです。

世界の人々に、未来に。

平和とは、安心して生活できること。

平和とは、一人一人が輝いていること。

平和とは、みんなが幸せを感じることに。

平和は、わたしたち自らがつくりだすものです。

そのために、

友達や家族など、身近にいる人に感謝の気持ちを伝えます。

多くの人と話し合う中で、いろいろな考えがあることを学びます。

スポーツや音楽など、自分の得意なことを通して世界の人々と交流します。

方法は違っていてもいいのです。

大切なのは、わたしたち一人一人の行動なのです。

さあ、一緒に平和をつくりましょう。

大切なバトンをつなぐために。

平成 25 年(2013 年) 8 月 6 日

こども代表	広島市立吉島東小学校	6 年	竹内 駿治
	広島市立口田小学校	6 年	中森 柚子

(3) 広島平和記念公園・周辺ガイドマップ



- | | | |
|-----------------------|---------------------|------------------------|
| 1 鈴木三重吉文学碑 | 2 旧相生橋碑 | 3 中国四国土木出張所職員殉職碑 |
| 4 広島県地方木材統制株式会社慰霊碑 | 5 原民喜詩碑(佐藤春夫の詩碑の記) | 6 動員学徒慰霊塔 |
| 7 広島市道路元標 | 8 花時計 | 9 原爆の子の像 |
| 10 平和の石塚 | 11 平和の時計塔 | 12 遭難横死者慰霊供養塔 |
| 13 原爆供養塔 | 14 平和の鐘 | 15 平和の石燈 |
| 16 韓国人原爆犠牲者慰霊碑 | 17 被爆した墓石(慈仙寺跡の墓石) | 18 平和の泉 |
| 19 平和乃観音像(中島本町町民慰霊碑) | 20 常夜燈 | 21 義勇隊の碑 |
| 22 広島二中原爆慰霊碑 | 23 広島市商・造船工業学校慰霊碑 | 24 慈母の像 |
| 25 原爆犠牲者国民学校 教師と子どもの碑 | 26 平和の像「若葉」(湯川秀樹歌碑) | 27 友愛碑 |
| 28 旧天神町南組慰霊碑 | 29 広島市立高女原爆慰霊碑 | 30 マルセル・ジュノー博士記念碑 |
| 31 朝鮮民主主義人民共和国帰国記念時計 | 32 平和の塔 | 33 嵐の中の母子像 |
| 34 祈りの泉 | 35 被爆したアオギリ | 36 全損保の碑 |
| 37 峠三吉詩碑 | 38 「材木町跡」の碑 | 39 原爆死没者慰霊碑(広島平和都市記念碑) |
| 40 平和祈念像(草野心平の詩碑) | 41 菩提樹の碑 | 42 平和の灯 |
| 43 祈りの像 | 44 旧天神町北組慰霊碑 | 45 広島郵便局職員殉難碑 |
| 46 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 | 47 平和祈念碑 | 48 原爆犠牲建設労働者・職人之碑 |
| 49 原爆犠牲ヒロシマの碑 | 50 石炭関係原爆殉難者慰霊碑 | 51 広島ガス株式会社原爆犠牲者追悼之碑 |
| 52 広島県農業会原爆物故者慰霊碑 | 53 毛髪碑 | 54 被爆動員学徒慰霊 慈母観音像 |
| 55 世界のこどもの平和像 | 56 平和記念ポスト | 57 平和の池 |
| 58 「平和の祈り」句碑 | 59 ローマ法王平和アピール碑 | 60 ノーマン・カズンズ氏記念碑 |
| 61 平和の門 | 62 原爆ドーム | |

平成25年度親子ひろしま訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市くらし安心部市民自治振興課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-82-5118

平成25(2013)年11月